

# 古代語, 現代語における動詞基本形終止文の機能

土岐留美江  
Rumie TOKI

日本語教育講座

## 1 はじめに

いわゆるモダリティ形式と呼ばれる日本語の種々の文末形式による叙法の性格や体系性を考える上で、助動詞や文末付加形式の何も付かない動詞基本形終止文が、どのような機能を担い、どのような位置を占めているのかという点は、看過できない重要な問題点である。

近年のテンス・アスペクト研究においては、古代語については、主として「つ」「ぬ」「たり」「り」「き」「けり」などの助動詞群が付加した場合との比較の観点から動詞基本形終止文が論じられており、また現代語については、いわゆる「スル」形としてその形態としての位置づけが論じられている。基本形は重要な分析対象として議論が進んでおり、その結果、基本形の形態としての性格は、古代語から現代語へと移り変わるに伴い、テンス的には「現在」から「未来」へ、アスペクト的には「不完成相」から「完成相」へという変遷が見られる、というのが大方の一致した見解となっている。

ところが、モダリティ研究においては、古代語については助動詞「む」が付加した場合との比較研究が注目され<sup>1</sup>、また、現代語については基本叙法の一つとして仁田2000などでも位置づけられてはいるものの、その複雑な用法分布の示すところの分析と考察は、尾上氏の一連の論考<sup>2</sup>によって始まったばかりと言って良く、十分な議論が尽くされているとは言いがたい。従って、古代語と現代語とで、基本形終止文の叙法としての性格は同一であるのか、あるいは何らかの通時的変遷が見られるのかという点についても、未だ明らかではない。

古代語から現代語へと移行する過程において起こった様々な現象のうち、いわゆるモダリティに関連すると思われる変化の代表的なもののみをいくつか挙げると、

- ・「む」「らむ」「けむ」「なり」「めり」などの多くの助動詞の変質あるいは消滅。
  - ・「かもしれない」「にちがいない」「つもりだ」「のだ」などの多くの分析的文末表現の誕生と発達。
  - ・係り結びの解体と消滅
- などがある。例えば助動詞「む」は連体法の内部にも

自由に現れ、「けむ」などを「む」の過去形と見なして良いならば、形式自体で過去を表すことも出来たものが、時代と共に、原則として連体法内部には現れない、意志専用の「う」と推量専用の「だろう」に分化して、その用法も発話時現在かつ一人称主体に限定して用いられるように変化した。それとほぼ同時に、「かもしれない」「にちがいない」「つもりだ」などの分析的文末表現形式が、「む」の失われた用法の特徴(連体法内部出現可、過去形可、三人称主体可)を備えたものとして補完的に発達を遂げ、それぞれ、いわゆる真性モダリティと擬似モダリティとして現代語のモダリティの体系性を形作るに至った。また、係り結びのような構文的手法によりある種の表現効果を挙げていた手法は変化し、古代語において係り結びが担っていたのと同種の効果のうち、一部は「のだ」構文に受け継がれているという指摘もなされている<sup>3</sup>。ここに挙げたことはほんの一例であり、まだ多数の要因がモダリティ表現の史的変遷に絡んでいると考えられる。これらの現象は、相互に関連しあいながら、総体として現代日本語のモダリティ表現の体系性を形成しており、当然、基本形終止文もそれらの変化の影響を全く受けていないとは考えられない。おそらく古代語と現代語とでは、様々な叙法の仕方の中で動詞基本形終止文の位置づけや性格づけに、何らかの時代的変遷が見られるのではないだろうか。

本稿で問題提起する内容、および今後の結論の見通しについて次に示す。

### 【問題提起】

叙法として見た場合の日本語動詞基本形終止文の機能はどのようなものか。それは古代語から現代語に至るまで同じと見て良いのか、あるいは何らかの変遷をたどっているのだろうか。

### 【主張】

動詞基本形終止文は、テンス、アスペクト、モダリティを分化させない事柄の概念レベルの表現に用いられ得るという基本的性質を有し、この点では古代語も現代語も同様である。しかし、最も典型的な用法<sup>4</sup>は古代語と現代語とで異なっており、古代語では事柄の存在を(現実的/概念的に)提示する用法が、現代語では未来の予定や行動を告知する用法が中心である。叙法としては、共に

叙述に分類されるが、前者が典型的な叙述表現であるのに対し、後者はよりアクチュアルな一回的行為を表す傾向が強く、状況によっては意志表現から命令表現へと連続する、より現場的な行為実現効力を有する叙法へと接近している。

古代語と現代語の動詞基本形終止文の用法について、実例に観察される分布に基づいて比較、考察を行い、その性格とモダリティ体系の中での位置づけを明らかにすることが、最終目標である。そのための第一歩として、本稿では、考察の前提となる概念と先行研究での問題点を整理し、今後の研究に臨むにあたっての基本的立場を明らかにしておくことを直接の課題とする。

## 2 概念整理

### 2.1 モダリティ, ムード, 叙法

日本語研究におけるモダリティという用語が、研究者によって様々に異なった定義で用いられていることは、既に諸氏の指摘するところである。現代日本語モダリティ研究において、おそらく最も多数の研究者に引用され、賛否両面を含めて継承されている仁田氏の概念定義を次に示す。

仁田2000では、

命題とは、おおよそ、話し手が外界や内面世界との関係において描き取った、客体的・対象的な出来事や事柄を表した部分である。それに対して、モダリティとは、おおよそ、言表事態をめぐっての話し手の捉え方、および、それらについての話し手の発話・伝達的態度のあり方を表した部分である (p.81)。

と述べられている。そして、モダリティは発話・伝達のモダリティと命題めあてのモダリティとに分かれるとし、それぞれの概略的規定は

発話・伝達のモダリティとは、言語活動の基本的単位である文が、どのようなタイプの発話・伝達的な機能を担っているのか、といった発話・伝達の機能類型や話し手の発話・伝達的態度のあり方を表したものである。それに対して、命題めあてのモダリティとは、話し手の命題 (言表事態) に対する把握のあり方・捉え方を表したものである (p.82)。

とされている。モダリティの中の二大別 (発話・伝達のモダリティと命題めあてのモダリティ) は、それぞれ形態的にも別個に分類されるべきものと扱われているかのような印象を受けるが、次の記述から、両者は同一の形態上に同時に生起する存在であると考えられていることが伺える。

- 1) どうか僕に力を貸して下さい。
- 2) この夏一緒に北海道に行こう。
- 3) もう秋田は寒かったかい。

- 4) このケーキ、おいしいね。
- 5) たぶん明日は晴れるだろう。
- 6) やっぱ僕が間違っていたのかな。

(用例番号は土岐により変更してある。以下同様。) を例に取れば、1の文に観察される依頼や、2が表している誘いかけ、3の問いかけ、4の同意要求が、発話・伝達のモダリティの例であり、5に出現する推量や、6の疑いが、命題めあてのモダリティである (もっとも、こう述べたからと言って、5, 6が発話・伝達のモダリティを帯びていないというわけではない) (p.81-82 引用本文中の傍線は土岐による。以下同様)。

森山2000は、仁田氏とほぼ同様の立場を取っているが、モダリティと文の表現機能との関連性について明確な指摘があり、モダリティの定義の仕方もやや異なっている。森山2000での命題、およびモダリティの定義についての記述を以下に示す。

文は二つの要素に分けることができる。一つは、述べる内容として文の中核を構成する事態 (言表事態) である。これは「コト」あるいは命題 (proposition) とも呼ばれる。もう一つは、「述べ方」「発話の様式」を表す部分である。これはモダリティ (modality, ムード mood という用語を同じ意味で使う研究者もある) と呼ばれる。

モダリティは、文の発話行為的な意味を規定するものであるから、基本的に、「話し手」の「発話時」における「述べ方」を表す。(p.4)

また、仁田氏の「発話・伝達のモダリティ」「命題めあてのモダリティ」に相当すると思われる「聞き手めあてのモダリティ」と「内容めあてのモダリティ」について、「僕は帰る。」などの例では、両者の分別が非常に難しいと指摘しており、両者が重なり合う存在であることを示唆している点は、仁田2000と同様であると思われる。

また、従来は聞き手めあてのモダリティの代表格とされてきた終助詞についても、「今日はいい天気だなあ。」のように終助詞が聞き手めあてではない例が存在することから、

「聞き手めあて」という機能上の特性と終助詞という形式の位置づけについて、単純な対応関係は仮定できない。形態とその意味機能には重要な相関はあるが、文の構造を考える上で絶対的なものではない (p.11)。

と述べている点は注目すべきである。

従来、モダリティを形態に結びつけて文の構造上の要素とし、文を命題とモダリティとに二分されるものとする前提や、モダリティの定義に「主観的」あるいは「心的態度」という曖昧さを含む用語を用いることについては、既に多くの研究者によって問題視され、批判されている<sup>5</sup>。しかし、仁田2000や森山2000では、

山岡2000でも指摘されているように、従来の、文の構成要素としての形態に対応させようとするモダリティ論から、発話行為論への指向性を伺わせる、文機能としてのモダリティ論へと接近しつつある動きを見せており、この傾向が進めば前者の問題は解消される<sup>6</sup>。また、後者についても、既に引用したように、定義の記述に「主観的」という語を持ち込まない配慮がなされており、特に森山氏の「述べ方」という説明は、むしろ後述する尾上氏の見方とも相通じるものがあるように思われる。

以上のようなモダリティ観に異を唱えるのが尾上氏である。尾上2001では、終助詞をモダリティに含めない。また、内容めあてのモダリティと聞き手めあてのモダリティという二分法的観点も取らない。更にテンス・アスペクトとモダリティとに階層的関係を認めないなど、仁田氏らの説とは大きく異なっている。尾上2001の内容については、後節で再び取り上げて検討する。ここでは仁田氏らの論への主たる批判点の1つであるモダリティ論の範囲について述べられている点にのみ触れる。

日本語以外の言語を対象にしたモダリティ論において、話し手の発話の姿勢、対聞き手の気持ちや、疑問、命令など文の種類というようなものが「モダリティ」に数えられたことは、ない。モダリティとは叙法（ムード）の持つ意味、内実のことであって、モーダル・オグジリアリ（法助動詞）の表す意味のことである。発話をめぐる主観性一般がモダリティであるとする議論は、言語学上の「モダリティ」概念とは隔絶した、日本だけで主張される特異な“モダリティ”論であると言えそうである（p.302-303）。

この点については、田野村（近刊）で、

筆者の理解するところでは欧米の言語研究においてもモダリティという概念は必ずしも尾上氏の言うような意味にのみ限定されているわけではなく、実際、さまざまな品詞・構文にわたる広範囲な表現をモダリティ要素として認定している英語の研究もある（p.4）。

という指摘があり、また、工藤2000でも次のようにイギリスの M.A.K. Halliday 1970の説を紹介している。

“Modality”を対人的（interpersonal）な機能のものとし、“quasi-modality”による“Modulation（調整）”を観念（化）的（ideational）な機能のものとして区別しつつ、その絡みを見ようとしているのも、同趣のものと言えようか（p. 182-183）。

工藤2000ではこれらの先行研究を受けて、次のように、モダリティの定義には聞き手の要素が含まれるという考えを採っている。

本章では〈叙法性 modality〉を

話し手の立場から定められる、文の叙述内容と現実および聞き手との関係づけの文法的表現

と規定しておくことにする。（中略）この定義のポイントは、話し手、聞き手、現実（状況）、それに文の叙述内容という、言語活動の場における必須の四契機（cf. K. Bühler（1965<sup>2</sup>）のオルガノン・モデル）の間の関係表示（関連づけ）が叙法性である、と見なす点にある（p.184）。

以上、やや長く諸氏のモダリティの定義を引用し、検討してきたが、本稿ではモダリティの定義として、工藤2000の、話し手、聞き手、現実、文の叙述内容という四つの要素の関係づけが叙法性である、という立場に最も近い見解を取り、聞き手との関係を含まない尾上氏の（狭義）叙法とは異なる、（広義）叙法と呼ぶことにする。（以下、「叙法」とは広義叙法のことを指し、尾上氏の定義による叙法は狭義叙法と示す。）

また、対聞き手関係性を表す要素の中で、待遇表現については森山2000と同様、文体の選択として扱う見解を取り、叙法には含めない。

## 2.2 動詞基本形の定義

動詞基本形の範囲も研究者ごとに異なっており、終止形終止のみを指すものが最も狭い。古代語においては、「助動詞類のつかない形」を原則とし、係り結びも含めた連体形終止や已然形終止や、更に待遇表現や終助詞下接のものも含めた鈴木1992などが最も広いと言えよう。鈴木1992では、テンス・アスペクトについての分析を目的としており、このような概念定義でも問題はないと思われるが、叙法の分析を行うためには、係り結びや連体形、已然形終止の表現性との関係が未だ明確になっていない点が最大の問題となる。

係り結びと伝達のムードとの関連性を指摘した仁田1984や、係助詞「ぞ」と判断のムードとの関連性を検証した森野1992など、係り結びと、本稿で問題にする叙法との関係を指摘する論はいくつかあり、また、前述したように、係り結びによって担われていた表現効果と同様の効果を表すものとして、現代語の「のだ」構文を挙げる重見1999などもある。従って、現代語の「助動詞や他の形式を伴わない形」としての動詞基本形に対応するものは、古代語においては、係り結びを含まない終止法のみ、ということになろう。

また、現代語の終止形は古代語の連体形を祖としているが、終止形終止法に特徴的に見られる恒常的事実を表す用法（「日は東から昇って西へ沈む」など）が古代語連体形終止法には見られない。このような用法上の大きな異なりがあることから、現代語終止形と古代語連体形は性質的にも別物として扱うべきであると考える。同様の理由で已然形終止も別扱いする必要があり、本稿での考察対象範囲には含めない。

また、「あり」「をり」などの存在詞については、意志表現になりうる性質を持っている。現代語では、

- 7) (藤)「お母さん、あたし、恵子ちゃんと塾と一緒に行く約束してたんだから。もうちょっと、家にいる」(敦子194上-22)

のような例がある。また、古代語でも、「お仕えする」の意味を含んだ意志表現と見られる次のような例がある。

- 8) 曹司にゆきてよばすれど、(阿彌) 今宵はおまへに侍ふ。はやうさぶらひにまれおはしね といへば、(落窪57-3)

しかし、存在詞は意味用法の点で、他の動作動詞と同列に扱えない性質を持っているため、本稿での考察対象からはひとまず除く。

また、待遇表現については本稿では叙法の一種とは見なさないことを既に述べた。ただし、古代語の資料で待遇表現として機能している助動詞、補助動詞下接の場合をすべて除外してしまうと、用例数が極端に少なくなってしまう。そこで、分析上の便宜のため、これらが下接している例も収集することにしたが、待遇表現を直接の分析の対象とはしない。

また、終助詞については古代語ではあまり例が多くないが、「よ」などは「日は東から昇るよ」「僕が行くよ」など、下接した場合にも文としての恒常的事実や意志などの意味に違いをもたらさない。そこで、このような終助詞が下接したのもも収集することとした。従って、本稿での考察対象範囲は以下の通りである。

【肯定平叙文における動作動詞の終止形終止用法で、待遇表現以外の補助動詞、助動詞類が下接しない場合】

### 2.3 形態の機能と文の機能

動詞基本形終止文が表す様々な意味機能は、動詞基本形の形態としての意味記述だけでは規定できない。副詞などが添加された文単位の機能として考え、更にその文が置かれた場面的状況による影響の分析が必要となる。この点については、既にテンス・アスペクト研究の分野でも述べられていることであるが<sup>8)</sup>、狭義叙法の分析において、文としての意味機能とそれを取り巻く場面状況との関連を主張しているものに尾上氏の一連の論考があり、本稿でも同様の見方を取る。

また、発話機能論への展開を指向した、文機能論としてのモダリティ論の必要性を提唱している山岡2000も注目すべき論である。山岡氏は、山岡1992で、

通常、モダリティと呼ばれているものは、発話全体の表現意図が、主に文末に位置し、固定された形式の意義となっている場合に限られている。つまり、表現意図が文法化したものがモダリティと言えるだろう (p.84)。

というモダリティ観を示しているが、おそらく同様の

モダリティ観に基づいて、山岡1989で、動詞基本形終止文について次のような解釈を示している。

モダリティ形式が無標の動詞文は(異なる発話状況においては異なる解釈を受けるため<sup>9)</sup>未来の時間と話者の意志を備える、というように、構造的に規定することはできない (p.20)。

この考え方は、動詞基本形の叙法としての性格だけでなく、テンス・アスペクト的な性格についても正しく指摘していると考えられる。基本形のテンス・アスペクトの性格を形態に固定的なものとして捉えた場合、以下の第三章に述べるような問題が生じることが避けられないからである。

### 2.4 言語変化と資料性

土岐1999では、古代語と現代語における動詞基本形のテンスの変化と見なされてきた現象について、韻文と散文という、その時代の資料の性質の異なりによる要因が、従来認識されてきたよりもずっと大きいのではないか、という指摘をした。動詞基本形の叙法についても、特に「述べ方」という点で、資料の性質が大きな問題になる。この点については、別稿に譲り、本稿では立ち入らない。

## 3 問題の所在と先行研究

### 3.1 問題の所在—テンス・アスペクト研究における基本形の解釈と位置づけ—

現代日本語の談話においては、動詞基本形終止文の多くは意志表現として現れる。

- 9) (橋)「僕も行きます。行きたいです。」悟が言つて、俺の顔を見た。(芝居183上-14)

- 10) (坂戸)「じゃこうしよう。後一週間だけ面倒をみてやる。会社に出て来ても来なくてもいい。君が一本でも契約をしたら、また働けるようにしましょう。」(他人158上-1)

この現象は、現代語の動作動詞の基本形が、基本的に未来時を表すテンス的性格を持っているため、意志動詞であり、かつ一人称主体であるという条件が揃った場合に意志の意味が生じるものと説明される。

一方、古代語の動詞基本形は、動作動詞であってもテンス的に現在時を表すというのが大方の見解である。それに従えば、意志動詞で一人称主体の場合でも、意志表現ではなく、現在の状態を表すと考えるのが妥当であると思われるが、実際には、次のように意志表現と解釈できる例が多数存在している。

- 11) (兼刀) たゞいま対面す とて、出でていぬれば (落窪55-11)

- 12) (源氏) 中／＼うき世のがれがたう思ひ給へられぬべければ、心づよう思給へなして、急ぎまかで侍 と聞こえ給。(源氏・須磨2-10-4)

そのため、このような例は、古代語基本形におけるテ

ンスの異例として多くの先行研究で取り上げられ、様々な解釈が試みられている。

万葉集や古今集など、韻文資料についての先行研究の論の問題点については土岐1999で論じた。ここでは、主として源氏物語を資料とした鈴木泰氏の一連のテンス・アスペクトに関する論考の中から、鈴木2001での見解を取り上げ、この問題にどのような解決が可能かを論じる。

### 3.2 鈴木2001での論と問題点

前述したように、鈴木氏は古代語の考察対象を疑問文や係り結びも含めて広く認定しており、本稿とは範囲が異なることを最初に確認しておく。

鈴木2001では、テンスとアスペクトを定義した後、次のように述べている。

このようにテンス、アスペクトを定義したとき、最も大きな問題となるのは、おそらくはだかの形の位置づけであろう。現代日本語では、はだかの形スルは、テンスとしては、シタと対立して非過去を表し、アスペクトとしては、シテイルと対立して完成相を表すとされている。しかし、古代日本語では、テンスの意味においては、過去を表すキ形に対立して現在を表しており、アスペクトの意味においては、完成相を表すツ形、ヌ形に対立して、不完了の意味を表していると考えられる。現代語、古代語ともに非過去という枠内にはとどまっているので、テンスの意味における古代語と現代語との差異はそう大きいとは思えないが、アスペクトの意味においては、現代語が完了の意味を表すのとまさに逆の意味を表していることになる (p.25)。

鈴木2001では、テンスよりもアスペクトの問題を重視し、「時間的局在性」という概念を導入してツ形、ヌ形などと比較した場合のはだかの形スルを論じているが、多くの先行研究と同様、基本形の性質が、現代語と古代語とでは、テンス的にもアスペクト的にも異なっているという見解を取っている。

そして、現代語と同様の意志表現と見られる古代語のスル形の例については、ヌ形と比較しつつ次のように述べている<sup>10</sup>。

13) (入道からの文) この月の十四日になむ、草の庵罷り離れて、深き山に入り侍りぬる。かひなき身をば熊狼にも施し侍りなむ。……とのみあり。(源氏・若菜上)

14) (御消息) 院におぼつかながり宣はするにより、今日なむ参り侍る。……とあれば (源氏・葵)

(中略) ヌ形の (13) は、入道の入山は、たしかにまだ起こっていないことではあるが、十四日の予定であるとされていることから、将来に起こることが確定的な事態であり、未来の具体

的な出来事が表されているものと見るができる。(中略) 一方、はだかの形の (14) は、(中略) (13) のように、一定の未来の時点に位置づけられる具体的な出来事を表しているものではなく、源氏が参内の意向をもっていることを表していると解釈することも十分可能である (p. 33-34)。

鈴木2001での主張は、むしろ中略部で述べられている「時間的局在性」の有無にあるのだが、本稿で注目したいのは、意志表現の例を、未来時の出来事を述べたものと解釈せず、現在の主体の状況を述べたものと見て過程的意味のバリエーションと分類しようとしている点である。このような解釈を取った場合、現代語談話中に多数観察される意志表現としての未来時用法も同様の解釈を受けることになると思われ、その結果、現代語の動作動詞の基本形はテンス的には現在時、アスペクト的には不完了の意味を表すという、従来のテンス・アスペクト研究の見解を、根本からくつがえすような変更を余儀なくされる。この齟齬を避けるためには、古代語の基本形を用いた意志表現と現代語の基本形の意志表現とはテンス・アスペクト的に異なる解釈を受ける妥当性がある、と主張するしかないように思われるが、この点についての言及はない。

テンスの考察において、事態を認識する主体の精神活動としての作用面と、事態そのものとしての対象面との表裏の関係性は明確に分析されるべきであろう。これは既に多くの先行研究で述べられていることではあるが<sup>11</sup>、今一度確認しておきたい。過去の具体的な事態を過去として表現する場合、時間軸上に事態が起こった時点と発話時とを明確に二点として示すことが可能である。この発話時からの乖離のベクトルを過去と認識するのなら、逆方向のベクトルは未来と認識される。これがテンスの原理であるが、未来時の場合、現実の事態は未だ起こっていないわけであるから、対象面では事態は存在しない。従って、どのような未来であれ、人間が予想し、認識する作用面でしか存在の可能性を持たない。この点が過去の場合と異なる点である。もし、意志表現としての未来表現を、発話時時点において話者がその意向を持っていることを表す表現であると解釈するならば、過去表現についても、発話時時点において話者がその事態の過去であるという認識を持っていることを表す表現であるとパラレルに言い換えることが出来る。しかし、だからといって過去表現を現在時を表すとしたり、不完了相に含めるということは妥当ではない。未来表現について、このような論を展開するのは、テンスの概念の明かな混乱であるように思われる。ただし、方向性として、日本語にはテンスの概念は当てはまらない、という論に持つていくことで解決を図ることは可能であるが、鈴木2001ではそのような立場を取っていない。

鈴木2001では、基本形のテンスの変化を大きなものとは見なしていないが、少なくともアスペクトに関しては、古代語と現代語では全く逆であるという立場を取っている以上、両者に共通して現れる意志表現の矛盾を解決する必要がある。しかし、この点について納得できる解釈は示されていないようである。

鈴木2001で、ヌ形と比較した場合の古代語基本形の解釈として述べられた、主体がある意向を持っていることを表す、という意味は、古代語の場合、一般にム形によって担われていたとされる。基本形の意志表現に関する問題を解決するには、ム形との比較が不可欠であると考えられる。

### 3.3 尾上2001での論と問題点

動詞基本形とム形との比較を行い、日本語の述定形式の体系化を試みた優れた論考として、尾上2001がある。尾上2001では「未然形+ム」「未然形+ウ・ヨウ」と動詞終止形とを比較し、その性質を次のように規定している。

	古代語	現代語
未然形+ム 未然形+ウ・ヨウ	非現実事態仮構の叙法	意志・推量の意味の表示形式 (非終止法の場合のみ 非現実事態仮構の叙法)
動詞終止形	現実事態構成の叙法	事態構成の叙法 [非現実事態仮構 +現実事態構成]

(p.458)

そして、古代語と現代語とを一括して、日本語の述定形式の全体像について次のように述べている。

日本語の述定形式は、その事態の成立、存在を積極的に承認するか、ただ単に事態表象を言語的に組み立てるだけ(事態構成)であるかという第一の観点と、それが話し手にとっての現実世界(過去のことで今はそこにはないという場合も含めて)に属する事態を語るか、非現実界の事態を語るかという第二の観点と、この二つによって四つの象限に区分される (p.460)。

四つの事象を「現実事態・事態承認」「非現実事態・事態承認」「現実事態・事態構成」「非現実事態・事態構成」の順に甲、乙、丙、丁と呼び分け、述定形式を次のように分析する。

甲に位置するのは、[確言的承認=最広義完了]の述定形式(連用形接続のいわゆる「時の助動詞」すなわち古代語のツ・ヌ・タリ・リ・キ・ケリ、現代語のタ・テイルと、存在詞・形容詞の終止形)と、[特殊な承認]の述定形式(古代語では終止形接続のナリ・メリ、現代語ではヨウダ・ソウダ・ナイ)とである。乙に位置するのは、古代語の終止形接続のベシ・ラシであるが、現代語で積極的にここに位置づけられるものはない。叙法的性格

としてでなく、結果的に非現実事態をめぐってある主張をなしているというだけの意味でなら、現代語のウ(ヨウ)の終止形やハズダ・ベキダ・ラシイ・ダロウをここに数えることもできる。ヨウダ・ソウダも一面ではここに位置づけられることになる。丙に位置するのは古代語の動詞終止形、丁(非現実事態構成=設想)に位置するのは古代語の未然形接続のム・ズ・マシの全体と現代語のウ(ヨウ)の非終止法の場合とである。現代語の動詞終止形は丙と丁の両方にわたって位置する (p.460)。

尾上氏は現代語の例を直接の考察対象として論を組み立てているのであるが、終止形とム系述定形式に現れる意味用法の広がりをもどのように解釈すべきについての洞察は鋭く、そこから導き出された述定形式の体系は、古代語については非常に明確で整然としている。しかし、現代語については傍線部で示したように、随所に不明確さを含み、この視点における分析・分類が、果たして現代語についても有効といえるのであろうかという疑問が残る。尾上氏自身が先の表で示しているように、古代語と現代語とでは、ム系述定形式も動詞終止形も、相当に変質してきていると見られるからである。

例えば、尾上氏は考察に際して「あろうことか、あるまいことか…… (p.455-456)」「成功しよう見込みはない (p.456)」のような例を挙げているが、このような「ウ・ヨウ」形式の非終止用法は、現代語では古めかしい慣用的表現や書き言葉として残っているものであり、日常談話では通常用いられない。このような時代的变化については、尾上氏自身も注で次のように言及している。

ただし現代語の助動詞に限って言えば、一つの述べ方に対応する叙法形式という意味合いは薄れ、むしろ(推量なり意志なり否定なり過去なり)のある特定の表面的な意味を専門に表示する形式に相当程度変化してしまっているとするのが妥当である。古代語「ム」と現代語「(ヨ)ウ」のあいだにも、そのような変質がある(「(ヨ)ウ」の非終止法の現象を見よ。) (p.487-488)。

このように、現代語において「(ヨ)ウ」が意志、「ダロウ」が推量、という語形式による表面的意味の専門化を認め、更に非終止法が日常談話では行われていないことを考慮するならば、尾上氏が批判する、「事態内容を下接の辞で代表される話者の言態態度が包む」という図式で文の構造を捉えることに対して、深刻な問題として挙げている次の三つの批判点の内、第一と第二の点は解消してしまう。

第一。「(ヨ)ウ」があらかじめ「推量」「意志」という意味を持っている形式だとしてしまうと、一つの語形式の意味が(平叙文終止法で)なぜ、

「推量」と「意志」の二つあり、なぜそれだけしかないのかが問えないことになる。「意志」から「推量」へ（あるいはその逆）というような用法の拡張過程が考えられるのであればこの問題は解決できるが、この助動詞（正確には動詞の複語尾）は本動詞が文法化したものではなく、そのような拡張の論理も、そのような事実もない。

第二。平叙文終止法で現れる意味「推量」「意志」が、それ以外の構文環境では現れない。「(ヨ)ウ」が「推量」「意志」という意味をあらかじめ備えた形式だとすれば、これは矛盾である。また、非終止法においてあのような意味が出てくる理由が問えなくなる。

第三。上述のような、語順として下にある言表態度が上接内容を包むという「饅頭の皮」的な構文観を重層的に認める（タマネギの皮か）ならば、「～(ヨ)ウカ」という疑問文は「事態内容+意志」「事態内容+推量」を疑問の態度が包んでいるということになる。しかし、自分の意志を対象として自分で疑問するということとはあり得ないし、推量（不確かな判断）でありつつ疑問（判断の放棄）であるということとはあり得ない（p.484）。

動詞基本形について言えば、この形式が積極的には述べ方を指示しない無標形であるために、現れる言語環境により、また、必要とされる表現の時代的变化により、他の文末形式との緊張関係において様々な表層の意味を担うことが可能である。すなわち、動作進行過程を表すテイル形の発達以前には、その機能を補うような位置に立ち、△形が非現実事態の叙法として多様されていた時代には、それと相補的に現実事態の叙法としての機能をも果たし、逆に現代語のようにテイル形が有標形式として確立すれば、むしろ相対的に完成相的な立場に移行するなどである。このように、基本形が無標形として幅広い意味用法を担い得る原理は、尾上氏が分析された通りであると思われる。しかし、その時代に行われている叙法体系の中で、最も典型的に基本形が担っている機能は何なのかという事例に観察される多数派的用法は、当然、時代により異なっている。必ずしも多数派的用法が、イコール中核的用法であるとは限らないが、多数用いられる用法は、少なくとも、その形式の典型的な、すなわち中心的な意味用法としてその時代の話者に認識されることになる。意味用法の使用率が変化しつつ次世代に受け継がれていく中で、認識される言語形式の中心的な意味用法も変化し、それがその言語形式の新しい機能として確立していくことは自然な言語変化の流れであろう。

以上のように考えると、古代語と現代語を一括して、同じ視点からの分類枠組みに当てはめることは、無理があると思われる。尾上氏が提唱した分析は、むしろ、古代語の体系の分析として卓越しており、現代語の分

析については、現代語の実態を無理なく説明できる分析が必要である。現代語の助動詞が、推量なり意志なり、ある特定の表面的な意味を専門に表示する形式に変化してしまっていると見られるのであれば、それらの意味を個々の形式に対応した固有の意味と見なしてモダリティ論を展開することは、現代日本語の実態についての記述的妥当性を有している。本稿では、時代軸を設定することにより、尾上氏の提唱されている原理的体系が、どのように現代語の叙法体系の実態へと変化していったのか、という観点からの考察を行うことを主張する。

#### 4 まとめ

古代語と現代語における、動詞基本形終止文の用法の全体像についての考察を行うことが最終的な目標である。本稿で述べた概念定義や先行研究に対する見解をふまえ、本稿の最初に挙げた主張を裏付ける実例分析については、次稿以降で述べる。

#### 注

1. 高山1998など。
2. 尾上2001など。
3. 重見1999など。
4. 工藤2000などでは「やきつけられかた（p.208）」という呼び名で量（用例数）と質（意味機能）の関係が述べられており、本稿も同様の見方を取る。
5. 尾上2001、田野村（近刊）など。
6. 田野村（近刊）ではこのような方向について「モダリティが確かに意味の次元の存在物であるとしても、文法におけるモダリティの論はやはり言語形式に重点を置く従来の方法に意識的に踏みとどまるのが無難であろうと思われる（p.14）」という否定的見解が述べられている。確かに発話行為論にまで進めば、文法とは全く異質の問題になる。しかしモダリティに関する現象を考える上では、少なくとも山岡2000で提唱されているような、文機能としてのレベルを視野に入れなければ解決できない問題が多すぎるように思われる。
7. この点に関連して、山岡2000では、現代語のテイル形が付加した場合については意志表現から除外し、その理由について、次のように述べている。  
「僕はずっと君のことを待っているよ」のような文は、通常、時制意味は現在と解釈され、文機能も発話時の自分の状態を描写した〈状態描写〉と考えるのが妥当で、この種の文が意志表出と解釈されるためには、現在の状態が当事者にとっては自明のことであるために時制意味が未来に限定されるといった、語用論的条件の充足によってはじめて、《意志表出》の発話機能が発生すると考えたい（p.91）。  
土岐の考えでは、このような例文は、語用論的に特別な条件が課せられない限り、通常、今後の自らの行動を通告した意志表出文であると解釈される。もし、意志表出ではなく、あくまでも発話時現在の自分の状況を描写したいのであれば、誤解を避けるために「僕はずっと君のことを待っていたよ」と、むしろタ形を用いるのが穏当であろう。この問題については更なる議論が必要である。
8. 森山1984など。
9. カッコ内は土岐によるまとめ。

10. 例文は前後及び現代語訳文を省略して引用した。  
11. 工藤2000など。

### 【用例出典】

- 「源氏物語」新日本古典文学大系 岩波書店  
「落窪物語」日本古典文学大系 岩波書店  
「敦子の二時間」魚住陽子『文学1996』日本文芸家協会編 講談社  
「他人の夏」佐藤洋二郎『文学1997』同上  
「芝居の神様」大城立裕「同上」

### 【参考文献】

- 赤塚紀子・坪本篤朗 1998『日英語比較選書3 モダリティと発話行為』研究者出版  
大木一夫 1997「古代日本語における動詞終止の文と表現意図—テンス・アスペクトの意味を考えるにあたって—」『日本語の歴史地理構造』明治書院  
大野 晋 1993『係り結びの研究』岩波書店  
尾上圭介 2001『文法と意味1』くろしお出版  
加藤康秀 1993「古今集のテンス・アスペクト」『国文学解釈と鑑賞』第58巻7号  
川端善明 1997『活用の研究』清文堂  
金水 敏 1994「書評『古代日本語動詞のテンス・アスペクト』」『国語学』第176集 国語学会  
金田一春彦編 1976『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房  
工藤 浩 2000「第3章 副詞と文の陳述的なタイプ」『日本語の文法3 モダリティ』岩波書店  
工藤真由美 1995『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房  
栗田 岳 1999「モコソとモノの表現性」『平成11年度 国語学会春季大会要旨集』国語学会  
黒田 徹 1992「万葉集における動詞のテンス・アスペクト」『日本文学研究』第31号 大東文化大学日本文学会  
同 1993「万葉集のテンス・アスペクト」『国文学解釈と鑑賞』第58巻7号  
小島聡子 1995「動詞の終止形による終止—中古仮名文学作品を資料として—」『築島裕博士古稀記念国語学論集』汲古書院  
近藤泰弘 1979「構文上より見た係助詞「なむ」—「なむ」と「ぞ—や」との比較—」『国語と国文学』第56巻第12号 東京大学国語国文学会  
同 1989「ムード」『講座日本語と日本語教育』第4巻 明治書院  
坂倉篤義 1993『日本語表現の流れ』岩波セミナーブックス45 岩波書店  
澤田治美 1993「視点と主観性—日英語助動詞の分析—」ひつじ書房  
重見一行 1999『助動詞の構文機能研究—時枝詞辞論からの脱出—』和泉書院  
鈴木 泰 1993「時間表現の変遷」『月刊言語』22巻2月号  
同 1999a「改訂版古代日本語動詞のテンス・アスペクト—源氏物語の分析—」ひつじ書房  
同 1999b「宇津保物語における基本形のテンス—古代語のテンスにおけるアクチュアリティーの問題—」『国語学』196  
同 2001「時間的局在性とテンス・アスペクト」『日本語文法』1巻1号  
高橋太郎 1994『動詞の研究—動詞の動詞らしさの発展と消失—』むぎ書房  
高山善行 1998「モダリティ形式の連体用法—助動詞ムの場合—」中部日本・日本語学研究会第21回発表資料（於岐阜大学）  
田野村忠温 近刊「現代語のモダリティ」尾上圭介編『朝倉新日本語講座6 文法II』朝倉書店  
土岐留美江 1999「現代韻文資料における日本語動詞基本形のテンス」『国語国文』第68巻第6号 京都大学文学部国語学国文学研究室  
仁田義雄 1984「係結びについて」『研究資料日本文法』第5巻 助辞編（一）助詞（明治書院）  
仁田義雄・益岡隆志編 1989『日本語のモダリティ』くろしお出版  
同 1991『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房  
同 2000「第2章 認識のモダリティとその周辺」『日本語の文法3 モダリティ』岩波書店  
野村剛史 1994「上代語のり・タリについて」『国語国文』63-1 京都大学文学部国語学国文学研究室  
ハイコ・ナロク 1998「日本語動詞の活用体系」『日本語科学』第4号 国立国語研究所  
橋本四郎 1950「動詞の終止形—辭書・注釋書を中心とする考察—」『国語国文』第22巻第12号 京都大学文学部国語学国文学研究室  
福沢将樹 1997「タリ・リと動詞のアスペクチュアリティー」『国語学』第191集 国語学会  
福島悦子, 上原 聡 1999「会話における裸の文末形式の用法」『日本語教育学会秋季大会研究発表 予稿集』日本語教育学会  
益岡隆志 1991『モダリティの文法』くろしお出版  
森野 崇 1987a「係助詞「なむ」の伝達性—「源氏物語」の用例から—」『国文学研究』第92集 早稲田大学国文学会  
同 1987b「係助詞「なむ」の機能—そのとりたての性質と待遇性をめぐって—」『国語学 研究と資料』第11号 早稲田大学  
同 1989「係助詞「ぞ」についての考察—「源氏物語」の用例から—」『国語学 研究と資料』第13号 早稲田大学  
同 1992「平安時代における終助詞「ぞ」の機能」『国語学』第168集  
森山卓郎 1984「アスペクトの意味の決まり方について」『日本語学』第3巻第12号 明治書院  
同 1988『日本語動詞述語文の研究』明治書院  
同 1990「意志のモダリティについて」『阪大日本語研究2』大阪大学文学部日本学科  
同 1992「文末思考動詞「思う」をめぐって—文の意味としての主観性・客観性—」『日本語学』第11巻第9号 明治書院  
同 1997「書評『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』」『国語学』第189集 国語学会  
同 2000「第1章 基本叙法と選択関係としてのモダリティ」『日本語の文法3 モダリティ』岩波書店  
山岡政紀 1989「発話行為論とモダリティー擬似意向文をめぐって—」『言語学論叢』第8号 筑波大学一般・応用言語学研究室  
同 1992「意志表現の文型提示に関する一考察—機能シラバスの一つの原理として—」『日本語教育』77号  
同 2000『日本語の述語と文機能』くろしお出版  
山口明穂 1995「係結びの変遷」『築島裕博士古稀記念 国語学論集』汲古書院  
山口佳紀 1985『古代日本語文法の成立の研究』有精堂  
同 1987「各活用形の機能」『国文法講座』第2巻  
同 1997「万葉集における動詞基本形の用法—テンスの観点から—」『万葉集研究』第21集 塙書房



渡辺 実 1997『日本語史要説』岩波書店

(平成14年9月11日受理)